

-----チェルノブイリ子ども基金の活動を通して-----

チェルノブイリ子ども基金 向井雪子

「チェルノブイリ子ども基金」(以下「子ども基金」と記す)はフォト・ジャーナリストの広河隆一(現在「子ども基金」の顧問)によって1991年に設立された。以来、被災地においてさまざまな救援活動---医療機器・医薬品支援、サナトリウム運営支援、保養費支援、甲状腺手術後の子どもたちの支援---などを行ってきた。

事故から20年目の今年、「子ども基金」では、いくつかの取り組みを計画し、今も進行中である。今年の活動を通して子ども基金の過去を振り返り今後の活動も考えてみたい。

◆◇◆被災地ベラルーシでチェルノブイリ写真展◆◇◆

20年キャンペーンとしての最大の取り組みは被災地・ベラルーシで写真展を開催したことだ。

被災地で写真展を?といぶかしく思われる人もいるに違いないが、日本同様被災国と言えどもチェルノブイリのことは過去のこととなりつつある。あるいは過去のこととしたい国家上層部の人たち。たぶん日本のような情報公開もされていないと思われるベラルーシで、人々はどの程度事故を認識できているのか。撮影したフォト・ジャーナリストの広河隆一には、病院関係者や専門家に事実を知ってもらいたい、という強い思いがあった。

2006年4月、ミンスク・ゴメリで開かれる国際会議の場において写真を展示できれば、世界から集まる会議参加者にも見てもらうことができる。非公式に写真展を開いてほしいという話も伝わり、私たちは会議事務局に写真展の開催を正式に提案した。その結果、提案は受け入れられることになり、2005年の6月ごろから当局とのやりとりが始まった。紆余曲折はあったがボランティアの協力のもと写真展は実現し、ミンスクで5日間、ゴメリで2日間展示し、会議に参加した専門家や各国の市民団体、一般市民などに見てもらえる展覧会となった。特にミンスクでは一般市民が入れる会場だったため、先生に引率された学生、児童らが訪れ熱心に見ていたのが印象的だった。詳しいことは私たちの「基金ニュース」「ホームページ」などで報告している。

何よりも現地の人々の心を動かしたのは、遠く離れた日本の人々がこのような気持ちのこもった写真を撮影し、写真展を開いて自分たちにそれを



汚染地の母子—写真 広河隆一



写真展示を手伝うミンスクの学生

見せてくれた、ということに対してであった。日本国内で展示している写真よりはるかに大きいサイズの写真を用意し運んだ甲斐があった。よりインパクトのある写真展になったからである。7月から9月にかけて、「子ども基金」が支援しているミンスク郊外の保養所のある町の図書館でも一部開催中だ。保養所の職員は子どもたちにも見てもらいたいと言っていた。また、11月27日から1週間、池袋芸術劇場ギャラリーで、大きいサイズ40点の写真展が国内で初展示される。

◆◇◆国内での募金活動◆◇◆

★チェルノブイリ救援カレンダー

事故10年目の1996年から「子ども基金」では、救援カレンダーを製作してきた。広河隆一撮影の写真をカレンダーにして被災地の状況を訴え、売り上げを募金に回す、という一石二鳥を狙った企画だった。デザイナーもボランティアとして協力してくださり、全国の支援者から毎年カレンダーの注文が届くようになった。収益も100～150万円をあげて好調だった。

しかし、カレンダーを売って募金に、というのはどの市民団体も考えることで、次第に売れ行きが鈍り、3年前には思い切って、チェルノブイリの子どもたちの絵を採用し、小型化して価格も抑えた。このカレンダーは新鮮で好評だったが、なんだか物足りないという声も聞き、2006年版は「チェルノブイリ20年の刻印」と題した広河隆一の写真によるカレンダーを復活させた。長年取材し撮影した中から選りすぐった2006年版カレンダーは好評を博した。

★救援コンサート

カレンダー同様子ども基金のイベントはすべて頭に「救援」の文字が付く。それは単なるイベントではなく必ず募金に結びつける、という趣旨のためだ。例年4月26日前に〇〇周年救援キャンペーンと銘打ったコンサートを開催している。20年目の4月はウクライナ出身の歌手、ナターシャとその妹カーチャによる姉妹コンサートを計画。各地「労音」と市民団体とが協力しあって全国9カ所で開催した。ウクライナのバヤーン奏者も交えたコンサートに多くの観客が足を運び、ウクライナの伝統音楽に魅了され、救援を考えるイベントとなった。

一番最初の救援コンサートは、1993年に加藤登紀子、ヤドランカというプロの歌手によるコンサートだった。このとき、ベラルーシ・ホイニキ地方から保養に来ていた子どもたち11人も舞台上上がり、加藤さんらと一緒にベラルーシの歌を歌った。

その後ナターシャが所属していたウクライナの子ども民族音楽団「チェルボナ・カーリーナ」を招へいし全国各地でコンサートを行った。子どもたちの健康回復と希望を持たせるため、今は廃墟と化したプリピャチ出身の音楽教師が呼びかけてグループは結成された。現在も子どもたちの練習は続けられており、すでに大人になった元団員たちとの合同コンサートが20年目の4月、キエフで開かれた。「子ども基金」では、このグループに対して教師や伴奏者の給料などの支援を続けている。自分自身や家族の健康に不安を抱えながらも、明るく踊り



ナターシャ&カーチャ姉妹一写真 広河隆一



チェルボナ・カリーナの練習風景—写真 広河隆一

歌う子どもたちの姿が感動を呼び、その後も数回来日している。

20年キャンペーン企画として、「夏コンサート」も実施した。国内で行う夏のイベントも初なら内容も初めての試みだった、ベラルーシバレエ（ブーベル&美季）ともう1人のウクライナ出身の歌手・オクサーナによる歌、それに日本の市民合唱団というプログラムでの救援コンサートだった。ナターシャ同様オクサーナもチェルノブイリの被害者でバンドウラ奏者でもある。

「子ども基金」の活動は多くのボランティアにより支えられている。今回ベラルーシのバレエとの競演が実現したのは、ボランティアとして関わってくださった人の娘さんがたまたまベラルーシ・ポリショイバレエ団に所属していた、という「縁」からであった。本場のバレエを鑑賞するよい機会となった。

コンサート会場付近の商店街を回ってポスター貼りやチラシ配り、特に夏の炎天下では楽な作業ではないが、一生懸命参加してくださるボランティアがいるおかげで続いてきた救援コンサートである。すでに来年の4月に向けて会場抑え、出演者交渉などが始まった。

コンサートを通じて集まった募金は、事故10年目の1996年4月の全国ツアーが一番多く、5会場合わせて約1000万円という大きな金額だった。その当時の「基金ニュース」に、“テレビ放送関係で14もの番組、ニュースでとりあげ、新聞記事は数十にのぼった、チェルノブイリ10周年の催しとしては大成功に終わったと自信を持って言える”、と代表だった広河隆一のあいさつ文が載っている。

それに比べて20年目の今年はどうだったのか。ここ数年は4月になってもほとんどチェルノブイリ報道がなかったが、2006年4月、マスメディアの報道には目を瞠った。いずれも被災地に特派員を派遣して現地からの特集記事を組んでいた。しかし、救援活動を取りあげるところは少なく、テレビ・ラジオではNHKがラジオやテレビの朝のニュースで「子ども基金」の活動やナターシャの歌を取り上げた。テレビのワイドショーで救援コンサートを取りあげたところが首都圏では1局。広島では何局も競って救援コンサートを報道してくれたのとは対照的だった。

「子ども基金」のような市民運動が今後も細々と続いたとして、30年目のときはどうなのだろうか。これは団体として続けて活動し、見届けないといけないな、と、この原稿を書きながら思っている。

★基金ニュース“チェルノブイリの子どもたち”

募金をくださった方への報告を兼ねた基金ニュースは年4回約3000部を発行している。募金の状況、その使われ方、被災地や子どもたちの様子、イベントの報告などを掲載。子ども基金の歴史をすべてという大げさだが、重要なことはほぼ刻んでいる。編集、印刷、発送作業まですべて事務局とボランティアが行っている。私自身子ども基金の立ち上がりのころから関わっているが、スタッフを退いている時期にも、ボランティアとして編集・発送作業を手伝ってきた。印刷も自分たちの手でお金をかけずにできるのは飯田橋にある「東京ボランティア市民活動センター」（通称ぼらせん）のおかげだ。ここで印刷機、折り機、カッターなども借りる。うまい具合に部屋も借りることができたときは発送作業もここで行う。インク代などが実費のほかはすべて無料。会議室まで無料のところなど今どきないから、予約ですぐいっぱいになるのはやむを得ない。多くの市民グループにとって強い味方だ。

ニュースは子ども基金のホームページ [<http://www.smn.co.jp/cherno/index.html>] に反映されており、1997年からの「基金ニュース」を読むことができる。ホームページを見た方から、ボランティアの申し出や募金の問い合わせが届くようになり、インターネットによる広がりを実感している。

★チェルノブイリ写真展と子どもたちの絵画展

国内での広報活動としてもっとも大きな役目を果たしているのが「写真展」と「絵画展」である。写真は50回近くにおよぶ現地取材で広河隆一が撮影したもの。現在約100点、絵画も約100点を子ども基金の姉妹団体「広河隆一・非核・平和写真展開催を支援する会」

[<http://www.za.ztv.ne.jp/miel23/syashinten/>]が管理・運営している（そのほかイラク、アフガン、パレスチナの写真も所蔵）。子どもの絵はウクライナの団体が事故10年の1996年にウクライナ全土に呼びかけて入選したものを日本に寄贈。

その後ベラルーシの団体からも寄贈されて、合計100点以上の絵があるのだが厳選した100点を貸し出ししている。それらは、子どもの絵と詩『生きていたい---子どもたちの叫び』（子ども基金編、98年、小学館発行）という本になり、多くの人たちに読みつがれている。今年、韓国の「釜山国際子ども平和映画祭」担当者がこの本に注目し、ぜひ、原画を借りたいという申し出があり、100点をボランティアと写真展事務局スタッフが持参しアジアの人たちにも見てもらう機会があった。

写真や絵は基金主催の救援コンサート会場で飾られたり「基金ニュース」を読んだ人から借りたいとの申し出があったりして、全国各地で展示されている。写真展を見た方が今度は主催者になってやりたいというように次々と輪が広がっている。市民団体、公民館、学校、幼稚園、教会、お寺など今までに数々のところで写真展が開催されてきたが、どうしても弱い分野が



チェルノブイリの核に傷つけられて
オルガ・ソコロフスカヤ（14歳）

《里親制度》 「甲状腺手術後の子ども」を対象に日本の市民から里親を募り月 50 ドル最低 2 年間支援してもらう制度。こちらのほうも「甲状腺手術後の子ども」に限定せず、経済的に困窮している家庭でチェルノブイリの被害者という条件に変更。里子として支援を受けている子どもは現在 100 人、今までに延べ 200 人の子どもが支援を受けている。

《奨学金制度》 「甲状腺手術後の子ども」を対象に奨学金制度というものもある。里子同様月 50 ドルを支援。奨学生の場合は卒業するまでということになる。原資は大口募金者からの寄付金で、奨学金として別会計にした中からあてている。奨学金を現在もらっている人は 50 人、今までに延べ 80 人が支援を受けている。

《若い家族支援》 前期のように 3 つの柱をたてて「甲状腺手術後の子ども」たちを支援してきたが、これらの子どもたちが「子」と呼べない年齢になり、私たちの支援のあり方から名称まで見直す時期にきた。数年前から議論を重ねているが、結婚、出産という問題に直面した甲状腺手術後の子どもたちをできる限り支援し続けていくことが今後も大事ではないか、今までの支援を生かすためにもそうすべきだというのが子ども基金の理事およびスタッフたちの共通認識だ。両親のうちどちらかが甲状腺の病気を持っていて、生まれてきた赤ちゃんにも健康障害がある場合、健康な人のような仕事にはつけない上、医療費はかかる。そこで、子ども基金では赤ちゃんのいる家庭を対象に「若い家族支援」を積極的に進めることになった。現在 24 組に、月 50 ドルの支援を行っている。

子ども基金が保養や薬などを支援し続けてきた甲状腺手術を行っている者同士のカップルが今年誕生。今後をあたたく見守りたいと思う。



若い家族たちの居住地--ベラルーシ



ナターシャ母子--ブレスト州



エカテリーナ母子--ミンスク市

★現地救援団体およびサナトリウムの運営を支援

特別保養のところで触れたように、ベラルーシでは学校機能もあわせもった、保養所「希望 21」の運営費を支援してきた。ベラルーシ政府とドイツの市民団体などが中心になって作られたこの保養所に「子ども基金」は立ち上げのときから関わってきた。当初施設の備品などの寄付が中心だったが、100%日本が支援する特別保養のほかに、低汚染地から交代で学校のクラスごと保養させる一般保養にも費用の一部を支援している。

一般保養については7%～約1割の支援を行ってきている。しかし、ベラルーシ政府の資金もドイツからの寄付金も次第に減少してきて、それに伴い政府の方針もたびたび変更になっている。たとえば、1回の保養日数が1カ月から今は3週間に減らされ、ゆとりのある保養・教育が次第に難しくなってきたという。保養だけの施設と医療施設との線引きを明確にする、との政府方針がこのほど打ち出された。今まで子ども基金が送った医療器具は今後どうなるのか、施設側としてもまだ明確な答えは出ないと言っていた。国の支援が減る中、より自助努力が求められている。

子どもたちのために最適の施設をとということでドイツも日本も支援してきたのだが、経営を安定させるために一部大人も使う施設に変更化しつつある状況だ。しかし、300人もの子どもが一度に滞在でき、学びながら保養ができ、安全な食物を食べることができ、森と湖に囲まれているこの施設は、子どもたちにとっては最高の場所だ。今は大人になった青年に今年4月にゴメリで会ったとき、「あそこで過ごした時間は夢のようだった。今でもよく思い出す」と語っていた。いつまでも存続させたいのが私たちの願いでもある。



特別保養の若者たち--サナトリウム「希望 21」



海で遊ぶ子どもたち--サナトリウム「南」

いのが私たちの願いでもある。

ウクライナでは、黒海近くのサナトリウム「南」を支援している。ここはキエフの救援団体「家族の救援」が運営している夏だけの施設だ。6月の終わりから8月いっぱい、約50人の子どもたちを交代で保養させる。子どもたちの選択からつきそい、医師の派遣などすべて子ども基金、現地団体、病院の協力のもと行われている。「南」でも甲状腺手術後の子どもだけを対象とした特別保養がある。

ベラルーシの「希望 21」とウクライナの「南」での特別保養期間中に、日本人ボランティアが参加する「日本週間」を97年より数回にわたって実施。98年にはボランティア18人を派遣し日本の文化を伝え、子どもたちと交流した。

甲状腺手術後の子どもが減っている現在、少しずつ条件を変えながら「特別保養」を実施してきた。今年は日本から4人のボランティアが参加して竹とんぼ作り、和食作り、盆踊りなどを若者たち・

子どもたちに教え、楽しみながら共に過ごした。「希望 21」は学校教育を保養の中にとりいれているのは前にも述べたが、この「特別保養」にも多彩なプログラムが用意されている。今年は若者たちのためにビジネスクラスも設けられた。社会に出たときの心構えや役立つことを教えたこのプログラムは、若者たちに好評だったという。今年こそ最後なのではないかと言われていたが、年齢を少しあげること、甲状腺以外の病気の子どもも参加させることで来年実施の見通しもでてきた。若者の保養を受け入れるところは少なく、現地救援団体はその決定を喜んでいいる。

現地救援団体の運営費も子ども基金では支援している。スタッフの給料、事務所の家賃、通信費などを支援。団体事務所の fax やパソコンも送っている。また、団体を通して甲状腺手術後の子どもたちには欠かすことのできない医薬品も支援。

★他団体との協力および今後の救援活動

昨年、札幌の救援団体「チェルノブイリのかげはし」が保養のため、ベラルーシ・クラスノポリエ地区の子どもたち 10 人を招待した。同行した小児科医ベーラさんに小田原で会う機会があった。実を言うと、クラスノポリエと聞くととてもなつかしい。私自身は訪問したことはないが、広河さんが最初のころ取材した場所にクラスノポリエがある。そのときのことは『ニーナ先生と子どもたち』という写真絵本になって出版されている。チェルノブイリ報告を最初にスライドで見たとき、ニーナ先生の結婚式の場面があった。新緑の野原で伝統にのっとりした式。目には見えない、匂いもない放射能の汚染地で、一見のどかな風景の中での美しい花嫁の姿に息をのむ思いだった。私が救援活動に関わるきっかけにもなったスライド報告だった。そのニーナ先生は今でも元気だという。「はい、よく知っています。2人の子どもたちも元気です。『ニーナ先生と子どもたち』という本は町の博物館に展示されていますよ」との返事に親戚の近況を聞くようななつかしい気持ちになった。

もう一つ他団体との関連エピソードを記したい。広島県の救援団体「ジュノーの会」はウクライナの医療機関を主に支援している。最近届いたニュースレターに、子ども基金の名前が出てきた。広河さんが昨年訪問した病院に、今年、医薬品代を贈ったのだが、この病院を広島の団体が主として支援。この病院の他部門には支援を以前から行っているが、この小児血液部門に対して支援を行っていなかった。さらに読み進めると、子ども基金のキエフ窓口の手伝いをしている、日本語通訳の名前も出てきた。今後も日本の他団体と協力し合って救援活動を進めていくことになるだろう。

日本では子ども基金のほかに北は北海道から南は九州までいくつかの救援団体があり、それぞれの団体にはまた大小さまざまな団体・個人が関



アロマセラピー器具--クラスノスロバダ寄宿学校



ビタリク 13 歳--ミンスク小児血液病センター

わっている。そして、それぞれの救援団体は現地団体と強く結びついている。

子ども基金の場合、大きな予算を組んで支援している団体、細々と支援を続けている団体、また広河さんが取材に訪れたとき緊急に支援が必要と思われた団体、実に多くの団体・病院などを支援している。実際には里子のように個人への支援も多いが、すべて現地団体を通しての救援活動だ。

日本の「草の根市民・救援活動」があちこちで誕生したのが事故2年目の1988年から1991年にかけてだ。その市民運動を発足当初から支えてきたのがカタログハウスという通販会社である。会社として市民団体の運営費を寄付、「通販生活・読者募金」として医療費などの寄付。子ども基金もそうだが、カタログハウスから支援を受けている市民団体は多い。

2001年をピークとして募金は次第に減少している。でも、子ども基金は首都圏に事務局がある強みか、地方の団体よりは募金活動がしやすい環境にあり、恵まれていると思っている。それでも募金の減少はとまらないだろう。チェルノブイリは何と言っても20年前のことだ。今戦争に巻き込まれている人々がいる。また、洪水、地震、津波と自然災害も容赦なく起きている。今、緊急に支援を必要としている人々を優先させなければならないのは当然だ。私たちはそういった世界にもたえず目を向けながら、チェルノブイリ救援に関わったものとして、被害者を見捨てることなく最善の努力は今後も続けたいと思う。それが日本と世界の脱原発につながると信じている。

最後に今、ウクライナに滞在中の基金スタッフからの最新情報を紹介したい。

ウクライナ医療科学アカデミー 内分泌研究所 放射性診断・放射性ヨウ素療法部

エプシュタイン教授の話；（2006年8月25日内分泌研究所で佐々木真理がインタビュー）

- 皆さんの支援に深く感謝している。長年に渡りこのような誠実で心のこもった支援は他ではない。たぶん日本は広島・長崎の悲劇を経験しているから、私たちの悲劇を同じものとして感じてくれているのだろう。ウクライナの役人たちは被害者に対して何もしようとしな。皆さんの支援がなかったら私たちはこれまではやってこられなかったと思う。チロキシンの量も、日本からのお金がなかったら私たちは買うことができない。私はいろいろなインタビューなどを受けるとき、必ず日本の支援について話している。
- 17年前から甲状腺ガン患者が現れ始めた。17年間で1570人。年間平均は93人となる。事故前に甲状腺ガンにかかる年齢は55歳くらいからだったが、事故後は7歳～20歳で甲状腺ガンにかかるようになった。今まで1972人治療したうち、90%が回復した。ガンと診断されると本人も家族も大変大きな打撃を受ける。しかし回復した時、彼らの目に輝きが戻るのわかる。
- 今年の1月～8月だけで200人の患者がいた。役人たちは甲状腺ガン患者の人数を隠している。9月から入院予定（放射性ヨード治療）の患者のリストが手元にあるが、その人数は51人。10月22日まではベッドの空きがないため、新たな患者はそれまで受け入れられない。
- 事故後国際原子力機関の委員は、人はガンにかからないと言った。その後91年には、チェルノブイリ事故と関係のある病気は甲状腺ガンだけだと言った。フランスとアメリカの専門家はその著書に「事故後40年間、人はガンにかかる」と書いている。
- これまでに甲状腺ガンの手術を受けた女性のうち200人以上が出産した。以前、産婦人科医たちは甲状腺ガンの手術をした女性が出産することを許可しなかった。私が妊娠した女性たちに出産を勧めたとき、「そんなことをすると刑務所行きになる」と脅しの電話が入ったこともある。幸いにも、今のところ生まれた子どもたちの健康に問題はない。最初に生まれた子どもは今11歳になった。母親も子どもも、検査を継続している。妊娠中はチロキシンの量を10回くらい変える必要がある。自分の休暇中にもそれぞれ妊娠中の患者たちのために、電話でたびたびチロキシンの量を指示していた。

- どうか日本の皆さん、支援者の皆さんに心からの感謝を伝えてください。いくらお礼を言っても足りないくらいです。

注：エプシュテイン教授が 2006 年 12 月 23 日に亡くられました。膵臓ガンと肝臓ガンが見つかり手遅れだったということです。子ども基金としても残念な気持ちでいっぱいですが、子どもたちやその親たちの痛手はいかばかりでしょうか。今後の病院事業が順調に進みますように私たちもできるだけの支援を続けていきます。心からご冥福を祈りたいと思います。

表 チェルノブイリ子ども基金の支援先(2006年度)

国名	団体名
ベラルーシ	➤ サナトリウム「希望21」
	➤ 困難の中の子どもたち
	➤ チェルノブイリのサイン
	➤ ミンスク第一病院
	➤ ミンスク小児血液病センター
	➤ クラスノスロボダ寄宿学校
	➤ ゴメリ市脊柱側湾症寄宿学校
	➤ ゴメリ州臨床小児病院
ウクライナ	➤ 家族の救援・キエフ医療リハビリセンター
	➤ キエフ・日本センター
	➤ サナトリウム「南」
	➤ チェルボナ・カリーナ
	➤ 子どもたちの生存
	➤ ニガヨモギの花
	➤ ウクライナ内分泌研究所
	➤ 放射線医療センター・内分泌部門 ➤ 放射線医療センター・小児放射血液部門 ➤ 放射線医療センター・小児産婦人科

